

NEWS LETTER

都市史研究

THE URBAN HISTORICAL SOCIETY OF JAPAN

VOL.

58

2008
0331

日増しに暖かみが増してまいりましたが、皆様におかれましてはますますお元気でお過ごしのことと存じます。2007年度最後の発行となります、都市史研究会のニューズレター58号をお届けいたします。新年を迎えてから都市史研究会ではフランス・ボルドー大でフランス都市社会史を専攻するフランソワ・J・Ruggiu氏を招待する企画を盛況のうちに行いました。また本研究会と連携した研究会も様々な活動を行っていますので、奮ってご参加くださいますようお願いいたします（詳しくは後述のウェブサイトをご覧ください）。

本号では2008年1月から3月までの活動の内容について報告いたします。具体的には2月に行われました例会と、3月に行われましたRuggiu氏を招いてのラウンドテーブルとワークショップの報告および参加記を掲載いたします。巻末には科研費基盤研究A「都市アイデアの生成と変容に関する研究」の昨年の調査旅行報告記も掲載しています。

最近、宛先不明で戻ってくるメールが増えてきています。メールアドレスを変更された方はtrad3ito@l.u-tokyo.ac.jpまでご一報くださるようお願いいたします。また既にご覧になられた方もいらっしゃるかと思いますが、昨年10月15日に「とらっど3」および都市史研究会のウェブサイトが公開されました（<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/trad3/>）。本ニューズレターとも連携しながら、今後とも情報の更新に努めて参りますので、ご愛顧くださいますようお願いいたします。

第68回都市史研究会例会

2月29日午後7時から、東京大学工学部1号館建築学専攻会議室において、第68回都市史研究会例会が行われました。当日はRuggiu氏を招いてのラウンドテーブルへの準備を兼ねて、竹下和亮氏によるRuggiu氏のレジユメの翻訳の報告と高澤紀恵氏によるコメントが行われ、活発な討議がなされました。

J.ルッジウ氏報告内容の紹介
コメント

竹下和亮（国際基督教大学アジア文化研究所）
高澤紀恵（国際基督教大学）

ラウンドテーブル「伝統都市の比較史 都市エリートと民衆」

3月11日午前10時から、東京大学法文1号館217教室において、ラウンドテーブルが行われました。当日は昼食やコーヒー・ブレイクを挟みながら、フランソワ・J・Ruggiu氏による報告と、ギョーム・カレ氏、小山啓子氏、西坂靖氏による報告が行われ、活発な討議がなされました。報告要旨は以下のとおりです。

報告要旨 十八世紀フランス都市におけるエリート層の居住形態

L'habitat des élites dans les villes françaises au XVIIIe siècle

(The elites residential strategies in the French eighteenth-century towns)

この講義では、18世紀フランスの都市エリート（貴族・役人・商人）の居住に関する戦略について、いくつかの事例を元に述べる予定である。その際、主要なフランス都市におけるエリート層の所在や地理的な移動に関する史料を呈示する。これまでは、単にエリート層が集住するために、街路や郊外が新しく開発されたことが、都市拡大の主な要因であると検討されてきた。それでも、わたしは、この居住地を分化するプロセスや新しい地域へ移住しようとする傾向に追従する願望などは、特に経済的な要因だけでなく文化的な制限によって阻止されていたことに言及したい。そのため、ほとんどのエリート層は、流行からは後れているが、長年にわたり家の財産としてきた高級で古い建築のある地区に居住し続けたのである。

発表題目 江戸時代前期の金沢の町人エリートを考える ～石黒家の門閥町人の仲間入り～

ギョーム・カレ（フランス国立社会科学高等研究院）

発表題目 都市から宮廷への特使派遣：16世紀リヨンの市参事会・都市住民・王権

Les députés de la ville de Lyon en cour: le consulat, les habitants et le pouvoir royal au XVIe siècle

(The Urban Ambassadors to the Royal Court: Consulat, Habitants and Royal Power in Sixteenth Century Lyon)

小山啓子（神戸大学）

発表題目 19世紀京都における越後屋の重役手代の諸問題

西坂靖（専修大学）

ワークショップ「近世フランス都市社会史の方法と史料」

3月14日午前10時から、東京大学法文1号館217教室において、フランソワ・J・Ruggiu氏を講師に招いてワークショップが行われました。当日は昼食やコーヒー・ブレイクを挟みながら、午前の部と午後の部の二部に分かれて講義が行われ、活発な討議がなされました。報告要旨は以下のとおりです。

講義要旨 18世紀シャルルヴィルの人口・家族・移動

Populations, families and mobility in Charleville during the 18th century

ここでは17世紀初頭につくられた北フランスの小都市シャルルヴィルにおける人口について話したい。この都市では18世紀初頭から20世紀中頃にかけての都市住民に関する市勢調査の一群が例外的に残っている。わたしは市勢調査によるデータを教区の簿冊や公証人が保管した証書によるデータをクロスさせるといふ、国の補助金によるブ

プロジェクトに関わっている (<http://www-cahmc.u-bordeaux.fr/mpf/>を参照)。そこで、社会的流動性の増減パターンを理解するために、いくつかの家族についてその構成者すべての社会的軌跡をたどる考えである。また、その移住や家系の断絶についても注意深く検討したい。このワークショップでは、誠に貴重な市勢調査に対し、特別な注視をしているフランスおよびヨーロッパの社会史学者らが使用する文書と、総合的な調査結果とを呈示する機会とした。

講義要旨 近世都市の経験：“ego-documents”の証言

The experience of the early modern town : the testimony of the egodocuments

ここでは近世期（17～18世紀）の都市居住者が書いたフランスおよびイギリスの“ego-documents”（日記、自伝、年代記など）を取り上げたい。これらのテキストは、最初のワークショップで呈示した社会史の史料とは全く異なった種類のものである。これらの史料は居住者の日常とともに、町の共同組織や市民軍のような地方機関といった都市における権力との関係に光をあてるものである。これら French Public Archivesに保管されているすべての史料は、ウェブサイト上で公開するよう計画されており、これにも私は関与している (<http://www.ecritsduforprive.fr/>を参照)。



ラウンドテーブルとワークショップのーコマ

参加記

今回のラウンドテーブルでは「都市エリートと民衆」をテーマに、フランソワ・J・ルッジウ氏、ギョーム・カレ氏、西坂靖氏、小山啓子氏の四名の方から報告が行われた。初めは「都市エリート」とはどのような概念なのか、前もって明確なイメージを持つことができず、その実態および有効性を把握しようと考えながら参加させていただいた。

ルッジウ氏はエリートの居住形態について、その安定の要因と変化の要因に分けて分析、彼らの感覚を明らかにしようとする報告を、カレ氏は金沢をフィールドに石黒家の門閥町人への上昇という事例から金沢町人エリートの特質を考える報告を、西坂氏は「社会構造の磁場」でありながら町組に関与しない「超本店」三井家と京都との関係を明らかにしようとする報告を、小山氏はパリ宮廷への特使派遣を通して都市と王権のつながり方を考える報告をされた。それぞれ興味深い内容であったが、「エリート」の捉え方は不明なままであった。それが明確になったのは全体討論の時間であったのではないだろうか。質疑応答の中で、「エリート」とはある社会の中で卓越した存在であり、卓越の指標には、経済力・身分・文化的資本・政治権力との関係など様々なものがある、そうしたものの複合体が「エリート」であるとルッジウ氏は述べられた。その後「エリート」という言葉を分析概念、対象と

なる時代の人々がそう認識するもの、その時代の国家がそうみなすもの、の3つに分けて考えるべきであることなどが指摘され、分析概念としての有効性が徐々にはっきりとしていったように感じられた。すなわち、17・18世紀のフランス国家は国内の安定と戦争の遂行を目指し、封建貴族・法律家・大商人といった様々な出自の人々をひとしなみに扱おうとする傾向があり、そうした人々を「エリート」と括るというのである。そして、居住戦略を明らかにすることで都市の何を明らかにしようとするのかとの塚田孝氏の質問に答えて、ルッジウ氏は、居住形態をエリート性の発露と見たと述べられた。なお、全体討論の最後に日本の近世後期、いわゆる「内憂外患」の時代も当該期のフランスと同様の課題があるが、明治維新までそれが身分を越えた新たな特権層とならないことが日本とフランスの違いではないかとの指摘が吉田伸之氏によりなされた。ある文脈で有効な分析概念・手法をそのまま別の文脈に当てはめても同じように有効であるとは限らない。しかし、それはその手法が無効であるということの意味するものではない。様々なケースを比較しながらそれぞれの場面で最適な方法を見つけることが重要であるという、当然のことでありながら、しばしば忘れがちなことを改めて実感させられた。

ワークショップでは、「近世フランス都市社会史の方法と史料」をテーマに、ルッジウ氏による「18世紀シャルルヴィルの人口・家族・移動」と「近世都市の経験：“ego-documents”の証言」の2つの講義が行われた。前者は人口調査のデータをこれまでの社会史とは違った方法で用いる方法に関するものであった。いくつかの家族に対して構成者の社会的軌跡をたどるなど、ラウンドテーブルでの報告の手法と重なるものである。後者では4種類の具体的な史料をもとに、書き手の人物像も含め当時の社会の実態がより詳細にわかる“ego-documents”の利用方法を具体的に学べた。フランス革命前の農村社会がこれまで考えられてきたよりも保守的であった可能性が指摘されるなど、その有効性を感じた。ラウンドテーブルでは「都市エリートと民衆」の「民衆」が手薄になっている印象を受けたが、こちらはそれを補っているように思えた。

なお、エクスカージョンの場でいろいろな方とお話できたことも貴重であった。今回の一連の企画に参加させていただいて学んだことを今後に生かしていきたい。

安田智昭（東京大学人文社会系研究科修士課程）

アジア都市のアイデア オリンピック・北米化・復古

高村雅彦（法政大学）

2007年3月5日から8日まで北京と上海を訪れた。「とらっど3」による科研Aの研究の一環として行われた中国調査だ。それから1年が経つというのに、いまだ一つ一つの記憶が鮮明に蘇る。建築学術界をリードする鈴木博之先生と伊藤毅先生に同行させていただくわけだから、案内役の私としては緊張しないわけがない。しかも、将来の日本の学術を背負う超が付くほどの優秀な東大の学生も一緒だ。私大教員の一人旅のように、ネオン艶やかな街をふらふら歩くのとはわけが違う。私にとっては、何かトラブルでも起きて、公安にかかり国外退去となつては一生の責任問題である。よって、毎晩、明るすぎるほどの健全なホテルのバーで「都市のアイデア」に関する議論に明け暮れたのは、保守的ではあってもこれ幸いで、かけがえのない知識が教授され、貴重な経験となった。

私にとって、中国はふた月に一度は訪れる場所だから、もう日常的に身体化している。年に一度帰省すればいいほうの実家のある札幌よりは、よっぽど身近な存在なのである。そのうえ、中国以外のアジア、とりわけ台湾やタイにもよく出かける。だからといって、先生方にアジアを説明しようなどという考えは毛頭ない。都市も建築も世界中にありとあらゆる形と歴史をもって存在するわけだから、むしろ目に見えるそれ自体よりも、それをどのような切り口で見るかのほうがよっぽど重要で本質を突く。その点で、私は小学生のようなレベルだから、ほとんど受験生みたいなものであった。

さて、今回は同行させていただいた中国調査だけでなく、このところアジア都市を巡りながら考えることについて、とらっど3の研究テーマにそくしながらエッセイを書いてみたい。2008年4月から、教授会主任をやらされるので、朝から晩まで学部の事務作業に忙殺される日々が1年続くことを考えれば、今回は直前のちょうどよい機会をいただいた。

アジアの都市を考えると、伝統都市の分析を「社会＝空間構造」の把握と位置づけ、都市の歴史を「伝統都市 近代都市 現代都市」という三分法による継起的な展開として捉えて分析することは有効な方法である。また、伝統都市のかつての実体を掘り起こし、同質性と差異性を比較空間論的に把握することも、アジアの都市を相対化し一般化するには欠かせない作業となる。さらに、それとは別に、日本との関係論に昇華させてアジアの都市類型を位置づけ、さらには比較検討するのであれば、これまでに見られる大文字の思考ではなく、個々の場所に蓄積された具体的な事例を通しての分析

が求められるのであって、いままさにそれらをようやく実現できる時代にきていると言える。つまり、従来の都城論、あるいはモニュメンタルな宮殿や寺院の研究だけでなく、たとえば都市単位を構成する住宅や町家の形成を通時的に捉えながら伝統都市から近代都市へ、さらには現代都市へと続く形成過程を読み解くための基盤が成熟し、その作業が始まった。

本報告では、とくにアジアの都市に焦点を絞り、伝統都市から近代都市への形成を近代の街区開発と都市住宅の関係を例として、また近代都市から現代都市への変容を戦後の中国における都市軸や広場などの公共空間に存在するアイデアを例として見ていきたい。

伝統都市から近代都市へ

アジアの近代は植民の歴史ということができる。アジアの場合、その多くが宗主国によって国や地域が支配される植民そのものであるが、そうでなくても、タイや中国のように周辺からの影響を強く受けて、人々の往来により技術やスタイルが伝播するケースが数多く見られる。都市や建築では、自国のものをそのまま持ち込んで作り上げる例ばかりが目されるが、一方で、その時代の理想や先進性をボーダレスな環境のなかで実現させようとした例が少なくない。

とくに、街区の形態や規模と、そこにつくられる建築のあるべき姿を追求し計画した例は興味深い。日本統治下の台湾では、日本の技術者によって多くの公設市場建築がつくられた。いずれも方形の街区と一体となって計画され、その多くが1912年の台南西市場浅草マーケットのRC造や1908年の台北西門市場のレンガ造で、すべてにまったく異なるプランを採用し、市場とは思えないほどの華麗なデザインでつくられている点は注目される。堅固で大規模な空間を実現させながら、衛生面を様々な方法を使って考えつつ、近代にふさわしい都市空間を街区と一体となって出現させようとしたのである。この種の当時の理想としての市場建築は、自国の日本ではほとんど実現していない。

街区と一体となって一つの建築物を計画する例に、近代アジアでは娯楽建築も見逃せない。たとえば、パリとニューヨークをモデルに街区割りや塔が計画された大阪の新世界（1912年）は、その後、上海の新世界（1915年）・大世界（1917年）、さらに北京の新世界（1917年）の出現へと伝播していく。ここには同じ開発者や技術者の存在があり、ボーダレスな建設活動が活発に行われていたことを示す一つの例である。

台湾では、ブルバールやラウンドアバウトもいち早く採り入れられた。周縁に円形の交差点が点在し、街路樹の続く大通りの出現は、都市の様相を一変させ、ヨーロッパを想像させるような先進性が実現されたのである。一方、当時の日

本ではそれらがつくられることはほとんどなかった。これには、都市城壁の有無という伝統都市のあり方が大きく影響していて、城門や城壁の撤去後の空間をいかに近代化して再生するかといったアイデアとも強く関係している。しかも、この種の都市整備は、台湾と日本の関係だけではなく、たとえば1898年からの東清鉄道によるロシアの大連建設をも射程に入れて考えなければならない。当時のロシアは、フランスやドイツの技術者を多く抱えており、ランドアバウトの多いパリをモデルに大連の都市づくりをおこなったことは、よく指摘される。さらに、台鉄の建築に使われた鉄骨のリベットの太さや形状を見ると、日本では例がなく、当時のドイツ人技術者にたどり着くのであって、すくなくとも日本と台湾だけでなく、中国東北部までをも一建築文化圏として括り考察する必要がある。

技術者では、浅草の凌雲閣、通称十二階を設計したスコットランド人のウィリアム・K・バルトンも台湾とは深い関係をもっている。1896年、東京帝国大学衛生工事教師の任期が終わると、当時の台湾総督府民政長官であった後藤新平の要請にこたえて台湾に渡る。しかし、すぐにアジアで最も先進的で近代化を遂げていたシンガポールや香港、上海に視察に出向き、台北に戻ったのち、マガダム式の道路（1896年）や卵形の排水溝（1910年）の整備を行った。バルトンは街区形態にも新たなシステムを試している。近代にふさわしいとされた正方形の街区は、台湾の伝統的な町家や住宅と適合せず、内部に不衛生な空地を残存させる欠点があった。そこで、バルトンは南部の嘉義で、対角線を結ぶように道路を通し、三角形の街区が連続する都市空間を計画している。これにより残存する空地の減少は成し遂げられたが、一方で、自分がどこにいるのかわからないような不思議な都市空間が生まれることになり、それが欠点となったのか、その後は他の都市に応用されることがなかった。



台湾・嘉義のバルトンによる街区計画

このように、アジアの近代化では当時の理想や先進性が企図されたが、その一方で、実現と運用のプロセスには伝統の都市や建築の空間のあり方が大きく関係していたことは注目すべきである。その最も顕著な例は、近代アジアの住宅地開発であろう。どの都市でも、1860年代～1930年代の間に、伝統的な住宅あるいは町家の特質を継承しながら、集合住宅化が成し遂げられた。とくに、方形の街区の周縁にショップハウスと呼ばれる連続棟割店舗を配置し、内部に里弄という棟割住宅群を計画した住宅地は、北は天津から南はバンコクに至るまで広範な地域につくられている。住宅は、北京・天津・上海などの四合院や三合院といった中庭型住宅、マカオ・広東の奥に長い竹筒型住宅、ホーチミンの平屋住宅、バンコクの高床住宅など、どれもみな伝統住宅の空間構成を受け継ぎながら集合化させた特徴をもつ。一方、周縁のショップハウスは、1821年のシンガポールを起源とし、1860年代からのペナン・バンコク、さらには広州やアモイ、上海の騎楼、そして1920年代からの台湾の亭仔脚へと続く。1890年頃の東京神田柳原河岸煉瓦街は、確認できる最北端の事例として注目に値する。

街区の周縁に町家は計画されていないが、伝統住宅の特性を継承して街区全体に集合住宅を開発するという意味では、1920年代のソウルの都市韓屋や1930年代の大阪新開地の建売大工による長屋開発も近代都市に登場した新たな住宅地であった。いずれも明治中期から昭和初期にかけて、アジアに共通して展開した近代の一類型といえよう。

近代都市から現代都市へ

戦後直後、アジアの都市はそれぞれの国情に左右されながら、独自の道を歩むことになる。たとえば、東京では1948年の東京都美観商店街の指定とともに、GHQの要請による都の指導で露店を撤去し駅前整備を進める。東京の多くの場所で今も見られる「露店収容建築」は、そのときの都の斡旋や露店商の協同組合によって建築された名残である。すでにないが、銀一ストア（1945年後藤一雄）や新銀座ショッピングストア（1958年丹下健三）などもある。また、戦後に大きく減少したものに東京湾の水上居住者があげられる。宿舟と呼ばれる船に住む人々のことで、1908年の統計では37,948人を数えた。ところが、東京オリンピックの開催が決まると、都は陸へ上がるよう強く指導し、1965年には809人にまで減っている。これらは、いずれも「美観」「都市美」という名目のもとで「浄化」「排除」「収容」されたものであって、その根底には単純な欧米の街並みに対するあこがれや都市の公共空間の改革・再編のみならず、伝統的な日本社会の構造変革をも実現させようとしたものであった。

この種の近代都市から現代都市への変容は、アジア各都市のオリンピック開催に関わる都市再編に共通して見てとれる。たとえば、1988年のソウルオリンピックでは、東京と同じように露店や長屋が撤去され、1986年には上溪洞で長屋排除に対する大規模な住民の反対運動が起きている。1986年はソウルでアジアオリンピックが開かれる年でもあった。また、1998年のバンコク・アジアオリンピックでは、水路に並ぶ浮家の撤去が掲げられた。タイの伝統的な屋根がバス停に付けられるようになったのも、このオリンピックが契機となっている。そして、いま北京では、2008年のオリンピック開催に向けて「講文明（マナーを守ろう）」「美観」といったスローガンのもと、露店や看板の規制強化と撤去が進められ、一方で、伝統的な商業地であった前門地区をクリアランスし、そこに「復古」という新築による伝統再生がおこなわれているが、そこに計画の壮大なアイデアは見出せない。

この「復古」の現象は、いま中国全土に広がりを見せていて、いわゆる「清朝トラディショナル」と「1930年代モダン」の二つのテーマに大別できる。まちのリノベーションや建築の修理には重点を置かず、新規の開発にその土地の伝統的な色や形の一部を記号化させ新たに計画するのである。これにより、政府関係者や計画者は、伝統を継承しつつ現代にふさわしい発展ができたと自負している。しかしながら、蘇州の住宅地のように、ある地区の復古が一つの雛形となり、それとまったく同じ開発が都市中に広がって、どこも同じ風景となり、反対にまちの個性を失うという大きな問題を生じさせている。



北京・伸延する中心軸とオリンピック会場のタツノオトシゴ

そもそも、中国には一つの雛形を全国各地の都市づくりに応用するという歴史が古くからある。それは、中国という広大な空間にあって、都城を中心かつ頂点に、地方の末端の都市に至るまでを一つの構造のなかに組み込み、体系化して管理するという考え方であり、実践の手法でもあった。間口の柱間数や母屋桁数、各種装飾、肘木の断面寸法など、建築物もまた同じ系譜に置かれている。それをより明確に知らせ行き渡らせるために、儒教の教えが援用されたのもそのため、それゆえ、中国では都市から建築、広場に至るまで、方形の形態を徹底し、明快な中心軸をもち、左右対称に構成するというアイデアが存在し続けたのである。

したがって、現代都市においても、伝統都市のそれが何の疑いもなく応用されるのは、むしろ当たり前とさえ言える。現在、北京オリンピックの施設を南と北の郊外に配置し、伝統都市の中心軸を4倍の35キロにまで延伸しているのも、その例である。

とくに、中国各都市の広場には、それが最も顕著に表れている。1999年に再編された上海の人民広場は、北の人民政府庁舎と南の上海博物館が明快な中心軸を生み出し、東の都市計画館と西のオペラハウスが完全な左右対称形を完成させている。もともと南北の軸線を持っていた北京の天安門広場は、1959年の建国十周年の記念建築物である中央の英雄記念碑、東の革命博物館、西の人民大会堂、さらには中央やや南よりの1977年の毛主席記念堂の建設によって、中心軸がさらに強調されることとなった。もちろん、近代には1903年の大連中山広場や1922年の天津花園のように、ラウンドアバウトと一体となった円形の広場がつくられている。また、大連では、北の関東州庁舎（1937年）、西の関東州地方法院（1933年）、東の警察訓練所（年代不詳）からなる方形の長者町広場が、日本の関東州庁によって建設された。しかし、ここでも新中国設立後には、西に対峙する法院にあわせて、もともと3層だった警察訓練所の中央に塔を設けて、左右をまったく同じデザインにし、さらに広場の南に大連開放記念塔、のちに音楽堂さえも建築して、中心軸と左右対称を強調するための再編をおこなったのである。また、寧波の天一（宇宙）広場は、円形の入れ子型の空間構成でつくられた。これは、「天円地方」という儒教の教えにもとづき天と宇宙を円形で表現し、同時に外から中心に向かってヒエラルキーが高くなり、中央こそが皇帝の玉座とする絶対的な空間理念が、入れ子型となって具現化されたからに他ならない。

アジア都市のアイデア

最後に、まとめとして本報告の要点を示しておきたい。まず、国や地域に限らず、伝統都市 近代都市 現代都市のように、

都市を継起的な展開として捉えることが、どの時代の都市類型を考えるうえでも重要であり、有効であるという点である。本報告の中国都市のように、現代に至ってもなお伝統のアイデアが活かされている例は少なくないだろう。しかも、現代都市の基層に継承された伝統都市の実体を見出すことこそ、歴史的個性を失い、矛盾を顕在化させた21世紀の都市の危機的状況を打開することができるのではないだろうか。次に、日本の都市を考えるためには、欧州と北米だけでなく、アジアを組み入れることで、時間的・空間的に分析がより深まり、より立体的に日本の都市と建築の形成過程が浮かび上がってくるという点である。また、アジアの現代都市では、オリンピックと都市再編に共通した変容が見られる点は重要である。これが、少なくともアジアの都市では、19世紀に北米で形成され普遍化した社会＝空間構造の都市類型へと向かう契機と



「四合院文化を継承しよう」と書かれた四合院住宅販売所

なっているのは確かであろう。しかしながら、最後に示しておきたいのは、アジアの都市には、それとは異なる独自の考え方、つまりアイデアがいまなお継承されているという点である。だからこそ、アジアではなおさら都市の三分法にもとづいた考察が欠かせないのであって、その方法に立脚して今後の研究を継続していきたい。

いま、北京ではオリンピック開幕に向けて、最後の追い込みの時期に来ている。一見すると、無秩序な開発、あるいはテーマパークのような復古ばかりが目につくが、路地の奥では明らかに伝統に対する市民の意識が変りつつある。かつて東京オリンピックのときに、伝統的な家屋がことごとく破壊されたのとは違って、いま起きている北京の四合院ブームはその一つの例であろう。街角にある四合院住宅販売所や歴史と伝統の自覚を促す看板を見るたびに、たんに社会主義的なスローガンのいやらしさではなく、日本とは異なるアジア都市の再生への道の確かさを実感する。教授会主任業務を終えて、1年後に再びアジアを旅するのが、いまから楽しみだ。（本報告は以下のシンポジウムの原稿に加筆したものである。「欧米の計画と日本の近代空間システム」日本建築学会、2008年3月）

[付記] 本エッセーはとらっと3における科研A「都市アイデアの生成と変容に関する空間論的研究」のメンバーで、本年3月4日から12日まで中国・ベトナムを調査した際の記録の一部です。